
北原白秋の「科学的童謡」にみられるマザーグースの影響

田 中 泉

はじめに

19世紀末から20世紀はじめにかけて英国に創設されたアボッツホルム校やビデールズ校という新学校を皮切りに、欧米で発展した新教育運動は、大正時代の日本に児童中心主義を掲げる自由教育運動をもたらした。そうした教育実践のなかでも、雑誌『赤い鳥』をはじめとする童謡復興や児童自由詩運動、自由画教育など新たに展開された藝術教育こそ、「最も顕著な動きと成果を残した」¹運動であるといわれている。

その童謡復興や児童自由詩運動を推し進めていた北原白秋は、児童自由画教育運動の担い手である山本鼎、文藝教育論を提唱する片山伸、幼児教育の実践者である岸辺福雄と共に、大正10年1月、雑誌『藝術自由教育』を創刊した。そして、この第1巻第1号に白秋は次のような巻頭言を寄せている。

児童は歌ふ。それから踊る。活潑々*1 地に飛び跳ね乍ら自由に彼等の世界を拡大する。真に詩の中に生きさせることだ。詩は成人しつゝ忘れられる。此の危険こそは世の所謂教育の弊だ。予は詩を以て在来の頑迷固陋なる教育と闘ふ。詩だ。詩だ。詩は凡てを救ふ。²

このように、詩こそ新たな自由教育を切り開いていくものだという情熱を持って、白秋も創刊に携わった『藝術自由教育』であるが、創刊後10ヵ月、わずか10冊を刊行したところで休刊せざるを得ない状況に陥った。しかし、藝術を根本に据えた新しい教育に対する白秋の情熱は、雑誌の休刊と共に消滅することなく、その直後、「これまでの私の童謡に殆ど見られなかつた、全然別種の新童謡」³という形で表現されることとなったのである。これをもって白秋は「私は芸術と科学との円融といふ事に就いて、私の童謡を一步先に進めた」⁴と主張する。それらが本稿で取り上げる「科学的童謡」である。

これまで、白秋の「科学的童謡」に関しては、その「科学的」という捉え方の大仰さや内容の希薄さに否定的な意見が向けられてきた。たとえば、「教育への過剰意識ゆえに白秋が落ちこんだ陥し穴のひとつ」であり、「いずれも科学的知識を歌によみ込んだだけの、おもしろくも美しくもない作品が大部分を占めている」という批判⁵や、「『芸術と科学の円融』などという意義づけは、少しも高くかう気にはなれない」⁶という見方がある。

1 松平信久(1971) 11 頁。

*1 『白秋全集 20』(1986)においては、この部分は「活潑に」となっている (221 頁)。

2 北原白秋(1921a) 『藝術自由教育』巻頭言。

3 北原白秋(1922a) 58 頁。

4 同上 58 頁。

5 畑中圭一(1993) 48 頁。

6 佐藤雅道(1987) 201 頁。

こうした批判に対しては、はたして白秋が「科学的童謡」に込めた意図を十分に検討したうえでの批判であるかどうか議論の余地がある。しかし、それについては他の機会に譲ることとし、本稿では、白秋自身がそれまでの作品とは全く異なる童謡だと述べている「科学的童謡」の異質さ、そこにマザーグース^{*2}の翻訳体験、つまり異文化の伝承童謡と格闘した経験が影響を与えているのではないかと、この点について論じたい。

1. 藝術自由教育の見地に立つ「科学的童謡」

雑誌『藝術自由教育』休刊の後、白秋は大正11年1月号の『大観』に45篇の新作童謡を掲載している。当初、この『大観』1月号には、『藝術自由教育』が休刊になったために途絶えていた、小学唱歌の歌詞批判を完成させて掲載することになっていたという。ところが、その仕事に着手しようとしたところ、

突然に、全く突然に、私自身に於ても全く予期しなかつた感興が、それは全然の詩の感興が、私を顛動さして了つた。詩こそ私の本領である。私は無我夢中に之に向つて驀進する外なかつた。十二月の廿六日より今日まで十四日間、私はただ机にかちりついてみた。その感興は種々雑多の形式として私に現れた⁷。

そして、感興の溢れるままに民謡や詩、長歌や俳句を書き続けていくなかで、50を超える童謡も創られたのであるが、その中には白秋自身がそれまでの童謡とは大きく異なった内容をもつ別種の童謡とみなすものが20篇ほど含まれていた。それらについて白秋は「これは私にとつても記念すべき革新的作品である。少なくとも、詩としての芸術自由教育の主張を事実にして之等は確かに明してくるにちがひない」⁸と述べ、「科学的童謡」と称している。では、「詩としての芸術自由教育の主張」とは何を意味しているのだろうか。

ここで白秋は、かつて自らが藝術自由教育の宣言として述べた、「詩、音楽、絵画、此の三つの芸術が児童の美的情操を薫養する上に於て、無論何よりも必須なるべきであるが、小学時代に於ける此の美育なるものは、決して智育徳育と離して考へらるべきものではない」という主張を引用しながら、次のように論を進めている。

在来の無精神で、形式的で、無味で、非芸術的で、因循で、固陋な小学教育は十分に革新させられなければならない。第一に教師自身もつと詩を識りもつと芸術の薫染を受けねばならない。委しく云へば数学の教師も物理化学の教師も詩人であり、その芸術教育の根本精神から、まず児童を誘導しなければ本当ではないのである。⁹

このように白秋が主張する、藝術を根本に据えた教育の実践に寄与するものが、自らが創作した「科学的童謡」である。

^{*2} 本稿では、英語による伝承童謡を「マザーグース」と称する。

⁷ 北原白秋(1922a) 57 頁。

⁸ 同上 58 頁。

⁹ 北原白秋(1922) 59 頁。

数学は私の童謡「数学」の如くに先ず芸術的魅惑を以て教へてほしいのである。綴方は私の「言葉」の如く言葉の一々を鮮やかな生物として本質的に知覚させ、「五十音」の如く児童を自然の詩そのものと合致させ、自由に飛び跳ね歌ひ跳ねさして欲しいのである。¹⁰

とあるように、数や文字、自然界にみられる形状や現象は、単に知識として、黒板に書かれた文字や記号によって教えるだけではなく、子どもの感性に訴えかける方法を用いなければならないと説く白秋は、そうした方法の一例として、「数学」や「五十音」といった教科教育に直接的に結びついた童謡を投げかけたのである。

なお、『大観』1月号に掲載された一連の童謡は、第一部「主として芸術自由教育の見地に立って歌ったもの」（「科学的童謡」）と、第二部「これまで通りのもの」とに分けられている。そして、これらはすべて、同年6月発行の童謡集『祭の笛』に再録されているのであるが、そこではまた異なった分類がなされており、まとめると以下ようになる。

【表1】『大観』（大正11年1月号）掲載童謡数

区分	掲載童謡数
第一部（主として「科学的童謡」）	31
第二部	14

【表2】『祭の笛』（大正11年6月刊行）掲載童謡数

区分	区分内の掲載童謡数	『大観』の第一部に既載の童謡数
第一部	67	11
ねんねのうた	11	1
田舎のうた	15	5
知られない、なにか待たれるもののうた	14	4
寒いお山のうた	10	1
さびしい人たちのうた	11	0
鷺と鶴と蝸牛のうた	6	0
第二部	21	20
学問のうた	7	6
空のうた	9	9
花や鳥や獣のうた	5	5

【表2】の通り、『祭の笛』には『大観』所収の「科学的童謡」31編がすべて掲載されているが、とりわけ第二部は21編のうち20編がその「科学的童謡」である。それらが「学問のうた」のように言語や数学を題材にしていること、「空のうた」のように自然現象を題材にしていることを踏まえる

¹⁰北原白秋(1922) 59頁。

と、これらが「全然別種の新童謡が二十篇位出来上つた」というその20編に相当すると考えられる。
この20編は以下のような唄からなる。

【表3】「科学的童謡」20篇

学問のうた	言葉 五十音 歌へよ子供 おうた 数学 魔法使い (阿蘭陀船)：『祭の笛』のみに掲載
空のうた	雲のうた 星の歌 月暈日暈 太陽系あそび 日光 夕風朝風 月夜の虹 海辺の虹 陽炎
花や鳥や獣のうた	お月見 羽音 お花の家庭 小鳥の歌い手 卵

以下では、白秋によるこれらの科学的童謡において、マザーグースと関わった経験がどのような影響を与えているのか、という点について検討したい。

2. 「科学的童謡」におけるマザーグースの影響(1)－「軽さ」という新たな特徴－

佐藤雅通は、白秋自身が革新的作品、科学的童謡とよぶこれらの二十篇の中でも、「雲の歌」および「羽音」について、そこに見出される「まざあぐうす」の影響を以下のように述べている。

水脈の泡波、うろこ雲、
遥ばるつづく陽の入りは
いつも夕焼、月あかり、
雁が飛びます、わたります。(「雲の歌」三連目)

翡翠の羽音、
涼しく光る、
雨外套の緑いろ

スツと兄さん脱いだ音。(「羽音」七連目)

などは、歌謡の詩人白秋の本領をよく発揮した作品だ。もっとも技法だけが冴えて、重量がないという批判はありうる。予期せぬ感興によって憑依状態に入ったのだから、軽さはやむをえない。さてそこで、このような軽さ、自由さに童謡を解き放った契機は何だったろうか。それはやはり『まざあ・ぐうす』体験が、すべてとはいわないまでもかなり重要な働きをしたと考えられる。もし異国の伝承童謡に接してのウォーミングアップがなかったら、いかに予期せぬ感興に出会ったとしても、これほどの豊饒さは出てこなかった。¹¹

さらに、佐藤はこうした白秋の童謡にみられる軽さ、自由さが『まざあ・ぐうす』翻訳体験と関連しているのではないかという見方について、藤田圭雄による「大まかにいって、白秋にとって、この『まざあ・ぐうす』一卷をまとめ上げた仕事は、大変健康なリクリエーションであったようだ。わらべ唄に出発して、多少行きづまりかけていた新童謡の道を、のびのびと、自由に切りひらいてくれたともいえる」¹²という指摘を引き合いに出して強調している。

また、「科学的童謡」にみられるこうした軽さや自由さといった特徴については、三木卓も

ことば
言葉はかゝはい、

きれいなまもの
綺麗な魔物、

ちひなまもの
小さな魔物、

生きてるまもの
生きてる魔物、

ひいとつひいとつかはい。¹³

と始まる「言葉」という童謡を指して、次のように述べている。

これは北原白秋その人が、言葉をあつかってきた経験から流露した表現論であろう。童謡という、かれにとっては自家薬籠中の世界であったから、さしたる緊張もなくおもしろさに任せて遊んだ結果の作品だが、わたしは一行一行に白秋の肉体を確認する思いで読んできている¹⁴。

ここで三木は、「さしたる緊張もなくおもしろさに任せて遊んだ」白秋の創作姿勢と『まざあ・ぐうす』とを関連づけることはしていないが、マザーグースを特徴づける軽妙さは、白秋自身も『まざあ・ぐうす』巻末言において、「極めて都会的な軽快味とその縦横無碍の機知とにづばぬけてある」¹⁵と指摘している特質である。

このように、白秋が「全然別種の童謡」としている「科学的童謡」の新しさは、マザーグースの翻

¹¹ 佐藤雅道(1982) 201-202 頁。

¹² 藤田圭雄(1976) 134 頁。

¹³ 北原白秋(1921b) 332 頁。

¹⁴ 三木卓(2005) 288 頁。

¹⁵ 北原白秋(1921b) 216 頁。

訳体験がもたらした「軽さ・軽快味」もそのひとつであると解釈できよう。さらに、これらの童謡が「科学的」とであるとされる所以、つまり「藝術自由教育」の見地に立っているという特質について、そこにもマザーグースの影響がみられるのではないかと、という点から考察してみたい。

3. 「科学的童謡」におけるマザーグースの影響（2）—新たな題材の発見—

『まざあ・ぐうす』の巻末言で白秋は、「その快活、その機知、その鋭い風刺、無邪、諧謔、豊潤な想像、それ等の類ひ稀な種々相には流石に異常な特殊の光が満ちてゐる。」¹⁶と、自らが翻訳したマザーグースの特徴について述べている。ここには、白秋が童謡を創作するにあたって常にこだわってきた日本の伝承童謡と比較して際立っている特徴、それに対する驚嘆の念が強く示されているといえよう。

そして、白秋はこうした特徴をもつマザーグースに接し、そこで扱われている題材の意外性にも新鮮味を覚え、新たな「科学的童謡」の創作へと導かれたのではないだろうか。

3-1. 童謡「五十音」とアルファベットの唄

「科学的童謡」のなかには、「^{あめんぼ}水馬赤いな。ア、イ、ウ、エ、オ。」で始まる、五十音の各音韻を題材にした童謡、「五十音」がある。白秋は、この「五十音」や「言葉」といった科学的童謡が言語教育に対して持つ意義を次のように述べている。

綴方は私の「言葉」の如く言葉の一々を鮮やかな生物として本質的に知覚させ、「五十音」の如く、音の精神とその一々の個性に就いて、歌ひ乍らに悟らせ、「おうた」「歌へよ子供」の如く児童を自然の詩そのものと合致させ、自由に飛び跳ね歌ひ跳ねさして欲しいのである。¹⁷

この翌年、白秋は彼の理想とする藝術自由教育についてより詳しく述べているのであるが、小学校の言語教育において、まず最初に子どもたちが、ハト、マメなどの「文字」を教わっている状況を憂い、童謡「五十音」を挙げながら以下のように主張する。

これ〔童謡「五十音」〕は藝術自由教育の見地から作した新風の童謡の一つである。これは音の本質——その一々の含むところの色、声、味、香、触を五十音の各行に亘つて、おのづと歌ひながらに味得せしめようとして、自分自身に先づ感覚の風味を企てて見たものである。で、単なる語呂合わせのなぐさみから成つたものでは無い。

で、再び云ふが、今の小学教育に於て音を表現する一々の文字の形は教へるけれども、音そのものの感覚的本質については何の教へるところも無い。知らず気もつかぬからである。然し音の連鎖たる言葉の種々相が人間感情の唯一の象徴的表現である限り、音の一々はその根本を為すものである事を真に尊しとせねばならない。此の音の一つより詩も生まるるのである。・・・中略・・・藝術自由教育の根本は先づ此の音の言葉の祭に児童を自由に躍らせることである。¹⁸

つまり、童謡「五十音」は、ことばの音そのものが持つ、感覚に訴えかける力を子どもが存分に味

¹⁶ 北原白秋(1921b) 216 頁。

¹⁷ 北原白秋(1922a) 59 頁。

¹⁸ 北原白秋(1923)23 頁

わうことの必要性を説く、白秋の教育思想が現れた童謡である。現代の童謡においては、こうしたことばの音を題材にしたものは「ことば遊び」の童謡としてひとつのジャンルを形成し、決して珍しいものではないが、当時は作者自身にとっても新しいものとしてとらえられていたのであろう。三木は、この童謡について白秋が「単なる語呂合わせのなぐさみから成つたものではない」と弁解していることに触れ、「こんな弁解は今の時代なら少しも必要としない。こういう弁解をつけなければならないような時代状況の中で、かれが言葉遊びの歌を試みた、ということを考えにいれてこの童謡のはらむ自由を評価すべきだろう¹⁹⁾」と、この童謡のもつ新鮮味を評価している。

では、こうした新しい題材に白秋を向かわせたものは何であったのか。ここで連想されるのは、マザーグースにおけるアルファベットを題材にした歌である。“A was an Apple pie” や “A was an archer” ではじまる唄のように、アルファベットの音韻ひとつひとつを取り上げ、ことばの音に対するイメージを豊かに膨らませるようなものは、マザーグースのなかでも非常に馴染み深いものであろう。これまでも、白秋の童謡のうち、マザーグースの影響がみられるものとして、この「五十音」が挙げられているが、²⁰⁾これはおそらく、マザーグースにおけるアルファベットの歌との関連性を根拠にした論であろうと考えられる。

3-2. 『まざあ・ぐうす』から削除された「ABC」

こうした藝術的教育を目指した童謡が、マザーグースに歌われた世界とのかかわりを持っていることは、『まざあ・ぐうす』に訳出された「ABC」という童謡をめぐる以下の点にも見られる。

大正 10 年に刊行された『まざあ・ぐうす』の初版本には、ABC と題された次のような唄が掲載されている。

エ	ビ	シ	デ	イ	エフ	チ
A	B	C	D	E	F	G
エツチ	アイ	ヂエ	ケエ	エル	エム	エン
H	I	J	K	L	M	N
オフ	ビイ	キユウ	アル	エス	テイ	ユウ
O	P	Q	R	S	T	U
ヴイ	ダブリユ	エツクス	ワイ	ゼツト		
V	W	X	Y	Z		

うれしい、うれしい、うれしいな、

エ ビイ シイ をそ
A B C、を教はつた。²¹⁾

しかし、この歌は初版本以外の版では削除されている。植草裕子は、白秋の『まざあ・ぐうす』の諸本を 9 冊とインターネットに公開されている電子版 1 編を検討した結果、もつとも目立つ異同は、この 93 番の「ABC」の有無であるとし、この歌が 1930 年に出版された全集版においてすでに削除されていること、その点について白秋自身が後記で触れていることを指摘し、白秋が意図して削除し

¹⁹⁾ 三木卓(2005) 279 頁。

²⁰⁾ 滝田佳子(1982) 35 頁。

²¹⁾ 北原白秋(1921b) 186 頁。

たものであろうと述べている。そしてその意図については、

- ・アルファベットを覚えるための歌は、日本の子どもにとって有用ではない。
- ・マザーグースのなかにかくつか見出されるアルファベットを歌う歌のなかでも、この「ABC」はあまり面白くない。
- ・この歌の原詩は通常のマザーグース集には掲載されていない。
- ・訳詩が掲載された初出誌は知られておらず、草稿ノートにも含まれてはいない。

と、これらの理由から白秋自身が重視していなかったのであろうと述べている²²。

では、なぜ白秋はこの歌を削除したのであろうか。植草の指摘にある通り、この歌はマザーグースに見られる他のABCを題材とした歌に比べて面白みに欠ける。さらにいうならば、白秋が主張する、藝術自由教育の見地に立った言語教育、「音の言葉の祭に児童を自由に躍らせる」ことから程遠い。むしろ、先に引用したように白秋が批判の矢を向けている言語教育、「音を表現する一々の文字の形は教へるけれども、音そのものゝ感覚的本質については何の教へるところもない」教育を象徴しているとさえいえよう。そのため、白秋自身がその矛盾を感じ取り、この「ABC」は彼のいう「科学的童謡」もしくは、藝術自由教育にもとづいた教科教育を表明した思想に反するものであるととらえ、『まごあ・ぐうす』初版以降において、自ら削除したという可能性があるのではないか。

これらを考え合わせると、白秋が「科学的童謡」とマザーグースを関連づけているとみることができのではないだろうか。そして、このようにとらえるならば、白秋から「科学的童謡」が突如として湧き出すにいたった水脈には、マザーグースと真正面から関わった経験も含まれていると考えることができるのである。

さらに、マザーグースに取り上げられている題材が白秋の「科学的童謡」に与えたと考えられる影響は、以下のことにも現れている。

3-3. 算術を唄う童謡

白秋の教育論には、マザーグースにも触れながら当時の算術教育に対する批判が語られている。

数理について、つまり小学校に於いての算術についての教授法も、あまりに無味乾燥である。少なくとも聡明な児童、暗記力の強い、藝術的趣味性に富むだ児童が之を嫌厭するのも道理である。私の曾て訳した英国童謡にもかうしたものがある。数学という題である。

掛算はしちめんだう、
割算は因業、
比例は人泣かせ、
応用問題気がちがふ。

如何に児童が此の算術には悩まされるか。これを見ても破顔一笑されるであろう²³。

そこで白秋は、自らの理想とする算数教育に寄与する童謡、すなわち藝術教育の見地に立つ童謡として、次のような「数学」を創作する。

空には神様、ただ一人、

²² 植草裕子(2005) 4 頁。

²³ 北原白秋(1923)26 頁。

とう かあ おやふたり
父さん母さん、親二人、

そこで三人そろいます。²⁴

以下、足し算、引き算の登場する連が4つ続く童謡であり、「かういう風に算術は芸術的に教へてほしい」²⁵と白秋は述べる。

このように、マザーグースを引用しながらの算術教育に関する批判と、「数学」という童謡を合わせてみると、退屈な算数を呪うマザーグースの「数学」と、算数に退屈さを感じさせないような教育を理想として白秋が創作した童謡「数学」とは、その内容に大きな隔たりがあるものの、前者は童謡の題材として白秋に大きな新鮮味を感じさせたのではないだろうか。こうしたものも童謡の題材になり得るのか、という意味で刺激を与え、それは白秋の内に新たな科学的童謡、「算数」の構想が産み出される契機となったのではないかと考えられる。

3-4 不思議の世界を唄う童謡

科学的童謡のひとつに、次のような「魔法つかひ」という童謡がある。

ふしぎなまほう
不思議な魔法をつかひます、

みんなが知つてる魔法です、

知つてて、知らない魔法です。

ぼたん かれき
牡丹の枯木でございます。

これをたいやうでら
これを太陽で照しましよ。

ワン ツウ スライ
一、二、三、

それぞれ、ぼたん はなが
それぞれ、牡丹の花が咲きました。²⁶

以下、同様に「一、二、三、」という魔法がかけられて、畑に蒔いた林檎の種から林檎が生ったり、針と小刀が磁石に吸いついたりする様子が唄われる。この童謡について白秋は、「神秘は実相の中にあるのであつて、その外にある筈がない。私の『魔法つかひ』を読む人は或は声立てて笑ふかも知れぬ。然し真の不思議を不思議となし得ざる、また忘れて顧みざる人こそ私には余りに怪しく思われる」²⁷と

²⁴ 北原白秋(1922b) 341 頁。

²⁵ 北原白秋(1923) 278 頁。

²⁶ 北原白秋(1922b) 342 頁。

²⁷ 北原白秋(1922a) 60 頁。

述べている。そうした大人に比べると、子どもは真の不思議を不思議ととらえる存在であり、「児童は知らんとする。あらゆる触耳触目の個々に対して先づ、その神秘性、生命の不可思議を直視する²⁸。」ことを強調する。そして、こうした子どもの好奇心から発せられるさまざまな質問に対し、大人はいい加減な答えて済ませてしまってはならない、と説く。

このような主張に基づく「魔法つかひ」では、当たり前であるがゆえに見過ごしてしまうような、しかし子どもは「なぜだろう」と不思議に思うような自然現象等について、そこにみんなが知っていて知らない「魔法」が働いているとする。つまり、何でも知らんとする子どもの強い好奇心、自然界のさまざまな現象に不思議さを感じ取る子どもの特性に添った詩であるといえよう。そして、こうした特徴をもつ童謡にもマザーグースからの影響がみられるように思われる。

オーピー夫妻は、*The Oxford Nursery Rhyme Book* (1955)を編纂するにあたって、童謡を‘Baby Games and Lullabies’, ‘First Favourites’など9つの種別に分けているが、そのなかに‘Wonders’という項目がある。ここには、「妄想的でふざけきった、気違いじみているのに論理的な唄」が分類されており“*There was a little guinea-pig / Who, being little, was not big;*” (白秋訳:「天竺鼠のちび助は、 / 矮小だから太つちやみなかつた」)のような、幼い哲学者を楽しませる「分かりきった命題」や、“*If all the trees were one tree . . . / And if the great man took the great axe, / And cut down the great tree, / And let it fall into the great sea, / What a splash-splash that would be!*” (白秋訳:「世界中の木という木がひとつの木ならば、 / . . . 大きなその人が大きな斧をとつて、 / 大きな木を伐り、 / 大きなその海にどしんと倒したら、 / それこそ、どんなにどんなに大きい音だろな」)のように、「もし」ということばがもたらす思いがけない世界がうたわれている、と解説されている。²⁹こうした、自然に対する「もし」という発想がもたらす奔放な空想の世界は、‘Wonder’の章の冒頭に挙げられている、次のような唄にもみられるものである。

If all the world was paper,
And all the sea was ink,
If all the trees were bread and cheese,
What should we have to drink?³⁰

この唄は、白秋の『まざあ・ぐうす』に「飲むもの」と題して訳されている次の唄の原詩と、元を同じくするものであろう。

せかいちゆう ひと
世界中が一つのパイならば、

うみ
海がすっかりインキなら、

き
木がまたチイスとパンなら、

おれ の なん
俺たちの飲むものそりや、何だ。

²⁸ 北原白秋(1922a) 61 頁。

²⁹ Opie, I and Opie, P. (1955) viii.

なお、ここに挙げた詩の日本語訳は北原白秋(1921b)からの引用である。

³⁰ *ibid.* 135.

それこそ甲羅^{かぶらへ}経^{ぢいぬ}た爺奴でも

頭^{あたま}をかかへて一寸^{ちよい}まゐろ。³¹

このような、自然に対する奔放で荒唐無稽な空想の世界や驚きに満ちた世界は、子どもの自然に対する「なぜだろう」という好奇心から湧き出て、さらにまたそうした不思議な唄が子どもの自然に対する好奇心をさまざまな方向に掻き立てるであろう。このような世界がうたわれていることも、マザーグースの特徴である。そして、白秋が自然の神秘や不思議さを直観するという、子どもの特性に沿った童謡、あるいは子どもの知識欲に答えるような童謡の必要性を説いたことには、こういったマザーグースから受けた影響があるのではないだろうか。

その一方で白秋は、こうした子どもの好奇心や知識欲、新鮮な驚異から次々と生じる疑問に対して、大人や教師はいい加減に誤魔化してしまつてはならず、「知識的に仔細にその疑義を解く」ことが大切であり、「科学的にも児童に深く自然を観ることを教へるのは藝術的にも児童の靈魂を深く揺り動かす事である」と訴える。³²こうした考えは、「科学的童謡」に含まれる雲や花の形状を仔細に唄った童謡に表れているといえよう。そしてこの点は、マザーグースとは大きく異なっているところである。なぜなら、オーピー夫妻も述べているように、‘Wonder’に類する唄には、「自明の命題」のもつナンセンスを楽しむようなところがあり、それは物事が「なぜそうであるのか」に対して正しい理由を追究する姿勢とは相容れないものだからである。こうした点を考慮に入れると、白秋の科学的童謡は、マザーグースからの影響が読み取れるものの、一方では、白秋が拘る自身の教育観、くり返し述べている藝術自由教育思想という強固な基礎があつてこそ生み出された世界であることは否定できない。そのためにこれらの童謡は、先述したように「教育への過剰意識ゆえに白秋が落ちこんだ陥し穴のひとつ」という解釈もなされているのである。しかし、「科学的童謡」の特質については、一面的な見方による解釈に偏ることなく、マザーグースの影響なども考慮しながら検討していくことで、新たな側面が見出されていくのではないかと考えられる。

おわりに

白秋は、英国と日本の伝承童謡の共通性に注目すると同時に、マザーグースのもつ際立った特徴に驚異の目を向けている。そうした異文化の伝承童謡に真正面から関わった体験が、白秋の創作する童謡に新たな広がりをもたらしたことは、これまでの研究でも指摘されてきた。そして、本稿で扱った「科学的童謡」も、そうした影響がみられる童謡の範疇に属するといつてよいであろう。

そのひとつ、「水馬赤いな。ア、イ、ウ、エ、オ。／浮藻に小蝦もおよいでる」とはじまる童謡「五十音」について、三木卓は詩人としての自らが抱いた感想を次のように述べている。「この作品が、その後現代詩人ならだれもが興味をもつ、言葉遊びの詩との出会いのはじまりだった。わたしは、とにかくこうして一篇の詩を書いてしまつてもいいのだという快さを感じ、これもまた記憶に残るものだった」。³³

「こうして一篇の詩を書いてしまつてもいいのだ」——この新鮮な驚きはまさに、白秋がマザーグ

³¹ 北原白秋(1921b) 150 頁。

³² 北原白秋(1923)26 頁。

³³ 三木卓(2005) 270 頁。

ースに接した際の感想に近いのではないだろうか。マザーグースに唄われた、たとえばアルファベットの唄や算数の唄などをみて感じた新鮮味が、後に新しい題材を扱った童謡を創作する土壌を培ったのではないか。

しかし、すでに述べたように科学的童謡は、これまであまり顧みられることがなく、肯定的な評価に乏しい。だが、それ以前に創作したものとは全く異なった童謡であると、白秋自身が述べているからには、この「科学的童謡」を生みだすにいたった背景を検討するとともに、これまでにない新しさでもって白秋が表現しようとした世界について、多角的に詳細に考察してみる必要があるのではないかと思われる。

引用文献

- 藤田圭雄(1976) 「マザー・グースと日本の童謡」、『日本児童文学別冊 マザーグースのすべて』130-36 頁。
- 畑中圭一(1993) 「北原白秋」、富田博之・中野光・関口安義『大正自由教育の光芒』(復刻版『芸術自由教育』別巻) 39-49 頁、久山社。
- 北原白秋(1921a) 「巻頭言」、『芸術自由教育』創刊号 (『復刻版「芸術自由教育」』久山社、1993 年)
- 北原白秋(1921b) 『まざあ・ぐうす』アルス (『白秋全集 25』101-220 頁、岩波書店、1987 年)。
- 北原白秋(1922a) 「感覚と叡智」、『大観』対象 11 年 1 月号、1922 年 (『白秋全集 20』57-65 頁、岩波書店、1986 年)。
- 北原白秋(1922b) 『祭の笛』アルス (『白秋全集 25』221-383 頁、岩波書店、1987 年)。
- 北原白秋(1923) 「将来の児童教育」、『婦人公論』大正 12 年 2 月号、14-29 頁。
- 松平信久(1971) 「教育観成立の背景としての文化と児童観の問題—北原白秋による童謡復興とその児童認識を中心に—」、『立教大学教育学科研究年報』13・14 号、10-29 頁。
- 三木卓(2005) 『北原白秋』筑摩書房。
- Opie, Iona and Peter. (1955) *The Oxford Nursery Rhyme Book*. Oxford University Press.
- 佐藤雅通(1987) 『北原白秋—大正期童謡とその展開—』大日本図書。
- 滝田佳子(1982) 「北原白秋の童謡—『赤い鳥』を中心に—」、日本文学研究資料刊行会編『比較文学』13-38 頁、有精堂。
- 植草裕子(2005) 「白秋『まざあ・ぐうす』の諸本の異同について」、『マザーグース研究VII』1-16 頁。